

べ

トナム戦争以降、今ほどアジアの安全保障が脆弱に見えたことはなかった。米軍が10年に

及ぶ戦闘の末にインドシナ半島から撤退したときには、ベトナム人の死者は推計100万〜300万人、米兵の死者は5万8000人を超えていた。アメリカの国内政治はほろほろで、長く続くスタグフレーションが始まっていた。

世界ではソビエト連邦が冷戦に勝利しつつあるという見方が強まっていた。アメリカが南ベトナムの同盟国を見捨てたことは、アジア全域で経済的・政治的不安定という暗い未来を予感させた。

今やアメリカのアジアへの関与は、バラク・オバマ米大統領がアジア重視の「リバランス（再均衡）政策」を掲げてからわずか十数年で、ベトナム戦争が終結した1975年と同じくらい希薄になっている。

確かに、アメリカは日本、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、韓国とそれぞれ相互防衛条約を結んでおり、シンガポールを含む多くの地域で軍事基地や基地使用权を保持している。

ただし、ドナルド・トランプ現政権とアジアの民主主義国政府との関係は、長年の同盟国に見られるものとは程遠い。むしろ商取引に近く、

ASIA

アメリカ頼みの安全保障をアジアが「卒業」するとき

1975年のベトナム戦争終結から50年。「アメリカ・ファースト」が迷走中の今こそ
アジアの地政学的戦略を主体的に考えよ

長島昭久（衆議院議員）

共通の価値観や安全保障上の懸念はほとんど考慮されていない。

アジア諸国の指導者は不吉な既視感を感じている。第2次大戦後にアメリカが構築した地域の安全保障体制が75年以降、急激に崩れたことは、多くの人が知るとおりだ。

北ベトナムの共産主義勢力は、勝利から4年足らずでカンボジアに侵攻してクメール・ルージュ政権を倒し、インドシナの覇権を確立した。

一方、世界第2位の規模を誇っていたソ連海軍の太平洋艦隊は、ベトナム南東部のカムラン湾で米軍が建設した大規模な海軍基地を拠点とした。太平洋全域に軍事的プレゼンスを拡大したソ連は、高度成長さなかの日本と韓国に中東から石油・ガスを運ぶ輸送路を脅かした。

地域安全保障の中核だった東南アジア条約機構（SEATO）は77年に解散。ベトナム戦争で軍事作戦を支援した日本、韓国、フィリピン、シンガポール、タイに対するアメリカのメッセージは明白だった——こ

れからは自力で対処しろ、と。

幸い、当時の中国は、今日のような地域の脅威ではなかった。毛沢東の政策の狂気と文化大革命が深い傷跡を残した中国と、リチャード・ニクソン米大統領は関係改善に踏み切った。ただし、世界規模でソ連の勢力に対抗するためであって、アジアの新たな地域安全保障体制を築くためではなかった。

中国の経済改革がアジア経済の起爆剤となるのは、さらに数十年後の話だ。毛沢東後の中国経済は惨憺たる状況で、79年に鄧小平はカンボジア侵攻の「懲罰」としてベトナムに人民解放軍を派遣したが、あっけなく撃破された。非友好的なソ連と、傷を負ったものの経済的に強大なアメリカが支配する世界で中国が生き残るために、鄧は「改革開放」路線を本格的に推し進めた。

再び見捨てられ裏切られて

アメリカは、日本、オーストラリア、韓国といった忠実な同盟国に加え、最近ではインドと戦略的パートナーシップを結び、アジアで強固な立場を築き上げてきた。トランプはなぜ、気まぐれにそれを混乱させ、弱体化させるのか。

その理由の1つは、基本的な安全保障問題までも商業的な交渉と同じように扱おうとする「アメリカ・フ